短期派遣 EUROPA 派遣報告書

氏名：カン・ミンギョン
派遣先：国立ドイツ語研究所（Institut für Deutsche Sprache: IDS）
派遣期間：2012 年 2 月 6 日～2012 年 3 月 26 日
研究テーマ：ドイツ語における使役的事象の表現形式

派遣の概要：

2011 年 3 月 10 日から 2012 年 1 月 20 日までの約 10 ヶ月間の派遣に引き続き，上記の期間再度ドイツ語研究所（IDS）に派遣させていただいた。期間中は主に（i）状態変化動詞の語彙化の分析，（ii）状態変化動詞の項構造パターン（とりわけ「対格目的語＋方向の前置詞句」の結びつきで「状態変化＋位置変化」を表わすパターン）の分析に取り組んだ。

まず（i）に関しては，これまでの論文執筆の過程で見つかった問題点を改善しながら，論文の改稿作業に集中した。ここでは，使役交替という動詞の統語的特性と意味的特性との関わりが問題となっているが，動詞の中には，一定の語彙化規則で形成されたものと考えられるものだけでなく，歴史的変遷の中で偶然生まれたり消えたりした結果として定着したものがあり（Lexikalisches Zufall），必ずしも一つの原理で説明できるものではない。指導教員のエンゲルベルク先生からも当初から，現代ドイツ語における動詞の語彙化を「意味論的」に論ずることが果たしてどこまで可能だろうかという点を指摘されていた。しかし，動詞の意味と統語的特性は密接に関連しており，体系的に説明できる動詞が一定数存在することも事実である。そこで，（単に記述していくだけでなく）その傾向を統計的手法で示す方法を探ることにした。たとえば，形容詞派生動詞の場合，統語的特性（使役交替の可否），形態的特性（単一・分離・非分離動詞，前つづりの種類），意味的特性（程度化の有無（graduierbar/ nicht-graduierbar），基底動詞が結果状態（Resultatzustand）を表わすか，目標状態（Zielzustand）を表わすかなど）の間の関連性を統計的に調査・分析し，それに基づき考察することである。この作業に関しては，エンゲルベルク先生のご紹介で，研究所の統計専門の研究員とも相談しながら，私の問題提起に適切な分析方法を探ることができた。

分析に際してもう一つの問題は，対象としている動詞が膨大すぎるということと，中には特定の分野でしか使われないような特殊語彙が多く含まれており，考察において重要な部分が見えにくくなってしまっている部分があるという点である。そこで，分析対象を日常的に使用される語彙，明らかに状態変化動詞と言えるものに限定することにした。このような「意味」に基づくカテゴリー化は明確な基準を設定することが困難という難点があり，常に再構成できるものとして捉えることが重要であると考えている。もう一つの改善点として，語形成（Wortbildung）の観点から――前つづりと基底動詞のそれぞれの意味機能（結果・目標状態，使役行為の様態など）に着目し――，これまでとは少し違った形

で，状態変化動詞の語彙化のパターンを整理することができた。

次に（ii）に関しては，引き続きデータを増やしつつ，Welke, Jacobs などの先行研究を検討した。また，エンゲルベルク先生や関連プロジェクトチームの方々に，現段階の問題提起とデータを紹介し，分析の方向性について助言をいただくことができた。結果動詞と様態動詞の中間的な性質，構文的意味，構文の拡大に関わる意味などを中心に考察していきたいと考えている。

その他に，3 月初旬には，フランクフルトで開催されたドイツ言語学会の第 34 回年次大会（第 34 回 Jahrestagung der Deutschen Gesellschaft für Sprachwissenschaft (DGfS)）に参加した。「複合システムとしての言語（Sprache als komplexes System）」というメインテーマのもと，いくつのセクションに分かれて様々な研究発表が行われた。私は，「Grammatik im Spannungsfeld von Gradienz und Frequenz（度合いと頻度の領域における文法）」というテーマのセッションを中心に発表を聴講した。そこでは，フランス語の使役交替に関する発表を聞くことができ，その議論が参考になっただけでなく，私自身の研究の意義を再確認することができた。また，ポスターセッションでは，色々な大学で現在進められているコーパス関連の研究プロジェクトに関する情報収集ができ，大変よい刺激となった。コーパス言語学のワークショップもあり，そこでは最近注目されている統計ソフト R というものについて学ぶことができた。使いこなせるようになれば，データ処理など研究にかなり役に立ちそうである。さらに，3 月中旬には IDS の年次大会（Jahrestagung）が行われた。今回は「Das Deutsch der Migranten（移住者のドイツ語）」という社会言語学的テーマで，残念ながら私の研究分野と直接関わる発表はなかったが，ポスターセッションでは IDS のコーパス関連の様々なプロジェクトに関する最新情報を得ることができた。中でも，話し言葉コーパスの構築がかなり進んでいることを知ることができ，普段書き言葉コーパスを利用している私にとってとても有益だった。

今回の派遣は，前回の派遣で行った研究をより精緻化させ，執筆中の論文を完成させるためであった。残念ながら期間中にその目的を達成することができず，それについては大変悔いが残るが，恵まれた環境のもとで研究に集中できたのは，今回の論文に限らず，今後の研究のためにも，私にとって大きな財産となった。今後も，エンゲルベルク先生はじめ IDS の方々と連絡を取り合いながら，引き続き研究に励み，まずは，現在抱えている問題を解決して論文を完成させることが最優先課題である。そして，ドイツ語の研究と教育に精進することが，これまでお世話になったみなさまへの恩返しだと認識している。短期派遣 EUROPA の先生方・関係者のみなさま，IDS のみなさま，IDS 図書館や宿舎のゲストハウスで出会ったすべての人に感謝の気持ちでいっぱいである。本当にありがとうございました。